

銀色の貂（てん）

何に姿を変えて行ったら
きみは部屋に入れてくれるだろうか

赤胸の駒鳥なら
窓を開けてくれるかもしれない
きみのためにせいっぱい歌おう
でもたぶん
なぜ迷いこんだのかときみはいぶかって
親切にも窓から出そうとしてくれるだろう

きみは犬好きだから
二色のダルメシアンがいいかもしれない
きみはわたしの頭や背を撫でてくれるだろう
わたしがとびついても嫌がらず
頬をぺろりと舐められても 笑ってすませるかもしれない
ひよっとしたら
よしよしとわたしの胴に腕をまわして
抱きしめてくれるかもしれない

だけどそれまでだ

でも もしも
きれいな銀色の毛皮の貂なら
きみのベッドまで忍びこんでも
あきれて
見とれて
止めるのを忘れないだろうか
そしてそこでわたしは丸くなって
じゃましないで というふう
眠りこんでしまうのだ

満月がでて
わたしが元の姿に戻っても
きみはまじないにだまされて
円卓の騎士ランスロットがエレインと睦みあったように

わたしと契る
翌朝また銀色に輝く獣を見て
きみは夢かうつつかと迷うだろう

呪文よ
とけるな